

特集「ソフトウェア工学」の編集にあたって

丸山 勝久^{1,a)}

現代社会において、ソフトウェアが我々の生活や企業活動をのさまざまな局面を支えていることに異論はないであろう。このような状況において、ソフトウェアにはより高い品質が要求され、さらにソフトウェア開発にはより高い生産性が期待されている。社会に求められる品質と生産性を達成するために、ソフトウェアをどのように作ればよいのかという課題に挑戦しているのが、ソフトウェア工学である。ここでは、ソフトウェアの原理原則を探る理論研究から過去のソフトウェア開発事例に基づく実証研究まで幅広いアプローチが求められ、さらにはそれらを融合していくことが重要である。このような背景をふまえて、情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、シンポジウム、ワークショップ、研究発表など、ソフトウェア工学の研究者と実践者が集い、議論および交流するためのさまざまな場を提供している。本特集号も、そのような研究会活動の一環として企画したものである。

本特集号では、ソフトウェア工学に関連した研究開発全般について、最新の研究成果や開発事例に基づく知見まで幅広く掲載することを基本的な編集方針とした。さらに、通常の論文投稿方法だけでなく、ソフトウェア工学研究会主催で2012年8月に開催された、ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム2012 (SES 2012) に投稿されたシンポジウム投稿論文との同時投稿を奨励した。その際、著者の希望があれば、シンポジウム投稿論文をそのまま、あるいはシンポジウム投稿論文を拡張したものの投稿も受け付けた。ソフトウェアエンジニアリングシンポジウムは2006年から毎年開催されており、以前は開催を受けて特集号が企画されてきたが、2011年のシンポジウムから特集号との強い連携が図られ、2012年でもそれを踏襲した。

本特集号には、特集号への単独投稿とシンポジウムとの同時投稿を合わせて48編の投稿があった。厳正な査読および2回の編集委員会での審議を経て、最終的に17編の論文が採択された。その際、本編集委員会では、読者にとって価値のある論文をできるかぎり掲載するという方針のもとで、査読者の第1回目の判定が不採録および条件付採録の論文に対してひとつずつ丁寧に議論し、読者に有益であ

る可能性があれば不採録理由を採録条件に書き換えることを模索し、さらに採録条件を明確に提示することを心がけた。その結果、いくつかの論文に関しては、その質がより高まり、読書に有益な論文を掲載できることにつながった。さらに、実際の投稿論文を見ると、その内容は理論研究から実証研究、また上流工程から下流工程に至るまで幅広い領域にわたっており、ソフトウェア工学に関連した研究開発全般について最新の研究成果を掲載することができたと感じている。残念ながら、開発事例（実際のソフトウェア開発に関する経験論文）に関しては投稿がなく採録論文に含まれていないが、研究成果（手法やツール）を実際の開発プロジェクトに適用した論文が含まれている点で、本特集号の内容は産学の連携にも貢献できているといえる。

最後に、本特集号に投稿していただいた会員の皆様、本特集号の機会を与えていただいた論文誌編集委員会、多忙にもかかわらず丁寧な査読や議論にご尽力いただいた特集号編集委員と査読者の皆様に深く感謝致します。

「ソフトウェア工学」特集号編集委員会

- 編集長
丸山勝久 (立命館大)
- 編集委員 (五十音順)
阿萬裕久 (愛媛大), 鶴林尚靖 (九州大), 岡野浩三 (大阪大), 菊地奈穂美 (沖電気工業), 岸 知二 (早稲田大), 小林隆志 (東京工業大), 権藤克彦 (東京工業大), 坂田祐司 (NTT データ), 沢田篤史 (南山大), 白銀純子 (東京女子大), 高田真吾 (慶應義塾大), 田原康之 (電気通信大), 中谷多哉子 (筑波大), 中村大賀 (日本 IBM), 中村匡秀 (神戸大), 野田夏子 (NEC), 野中 誠 (東洋大), 花川典子 (阪南大), 松浦佐江子 (芝浦工業大), 松下 誠 (大阪大), 満田成紀 (和歌山大), 門田暁人 (奈良先端大), 鷲崎弘宜 (早稲田大)

¹ 立命館大学
Ritsumeikan University, Kusatsu, Shiga 525-8577, Japan
a) maru@cs.ritsumei.ac.jp